

花びらを轆く◇佐々木遥

ヨーグルトにベリーのドライフルーツをしずめて晩夏の朝のはげしさ

問われてもほかにはなくて切り花を切り戻すみたいなお守りかた

脆く白い花ばかりつぎつぎに咲く主語の大きいことを言うとき

言い返すのをこらえれば火を放たれてゆく私のなかの棧橋

指の骨の形を思いうかべてはこまかな雨を胸に降らせた

この人が好きだと思いうっせいに夏の花強風にあおられて

閉じられた質問ばかりに答えればいくつも下ろされてゆく錨

じわじわと来る恋しさに私はシンクへ沈むいちまいの皿

自分ひとりのものが欲しいということのとてもおお巨きな車輪のような

かなしげな予感にそなえしめらせた唇にややあわだつ微風

告げぬまま終わればこころの溶暗のために出てくる照明係

自転車で花びらを轢く 破壊衝動と忘れたい気持ちは違う

祈るときこまかな襷を梳いているやわらかにしろく光る櫛たち

片恋のあとは港へ いくたびも瞼に可能性の夜明けを

こころもとない私に風のなか運ばれる茶色い紙袋

ニューヨーク行きの機内にひとときの目的地共有しつつ飛ぶ

何本も映画観ながら空をゆくときにうしろへ流れる記憶

英語英語日本語英語ふたすじの運河の結節点での会話

たったひとつきしかいない部屋に着くその壁に飾られている蝶の絵

ひとつようなものしかなくてやや乾くたましいスーツケース開ければ

翻訳を読んでいくときさかさまになってゆく思考の水時計

ドイツ語ということだけしかわからない音楽聴きつづけるぬるい夜

燃えてしまうものなど、という気になって手紙を書かないまま秋になる

橋の下の水の流れをながめつつ笑ってこころの霽飼いならす

台湾人夫婦と会話するとき漢字でうめつくされる裏紙

天秤のゆれを小さくしていったウェブサイトいくつも読みながら

スペルミス指摘してくる波線のそれでも海ははるかなところ

日程は決まっているけどほんとうに帰るのか夢の鱗をおとす

さいごにはこまかなところへ流れつくようとのえて書くスクリプト

明け方に迎えの車に乗りこんでこころを遠い街だと思う

※歌壇賞応募作を改作したものです。

背中の熱◇結樹双葉

(わたしだけがわたしと貴女を間違へない) 姉の名前を告ぐ電話先

声だけは似てゐるねつて評されて絵画に触れたやうな気持ちだ

人肌にたりないぬるさ花のない花瓶の水に指をひたして

結婚の文字から顔を上げるとき魚の骨のやうな卷雲

カーテンの隙間はしんと保たれて三十日みそかをかける月のまばたき

くりかへし名前をよばれ三度目で猫を目深にかぶつて向かふ

挿入歌が流れるならば今だらう車窓を跨いでこんなにも虹

共犯にならないひとの影を踏み鳥居のあざやかなる線対称

方言を少しうつした喋りにもつまづかないで姉の新居へ

軍人のやうに佇むシェーバーに敬礼をして居間へ出ていく

いつまでが子供だらうね撫でてみて桃の産毛が痛かったこと

白桃を水蜜といふ祖母のゐて多めに届いた水蜜を剥く

薬指とばして小指をつないでる躊躇ひがちに降る天気雨

濡れ髪をまとめあげてく横顔にとほく花嫁の面影を見る

水槽は四角いひかりひとりきり尾びれを引いてゐる熱帯魚

ぬけぬけと妹である　ピンク色ばかり譲らなくていいんだよ

兄のことおにいちやんつて呼んである友の瞳にゆれる草原

はじめてのパーティードレスを黒にして秘密は秘密のまま葬る

かうふくと口にするとき幸福はそつとかなしい火を消す吐息

だからもう行きなよ離岸することにわたしのゆるしなんて要らない

真球のたましひを持つ貴女にはけして聞こえぬ讚美歌がある

肝心なときに無口な感情よステンドグラスを見上げる　父と

いくつもの知らないあだ名飛び交つて名字由来のものが気になる

新郎の友人つどふテーブルが異国の領土のやうにまぶしい

齒茎まで見せて笑つてもうずっと姉は少年を匿つてゐる

賭けることしないで帰るあたらしい名字で呼んで振り向くまでを

コンタクト・レンズ外せばふたしづく泣くのが善と誰が決めたの

祈りではなく願ひだと、神ぢやなく貴女に願つてゐるのだと、朝

しあはせにしてみせろつて歩道橋からの壮大なるブーケトス

歩き出すはうへと影が伸びてゐて背中の熱はあかるさと知る



溶けてゆく額◇松本翠

朝焼けを待てども昏き公園に徐々に羽化してゆくアブラゼミ

水底にまなこやはらかき魚のゐて影をおとせりその水底に

水の出ない噴水の前にゐる子らよ生は死よりもあやふきものぞ

晩夏そは言ひ知れぬ地平コスモスのか細き茎があまたさやぎぬ

夕雲にひかり絶えたり暁のめぐりくるまで日は睡りゐる

いつかきつと女の子になれると信じをりしわたくしを打ちくだいた声変はり

をとこのこの生理なるもの耐へがたくその度に死ぬるとき心地す

母の意に添はぬわたくしオレンジの雨傘を持つことさへ許されず

消ゆる星消えぬ星ひとつづつありてならべり月の見えない夜に

さくら咲くはおぞましきこと 一本の白木蓮の木がおびえゐて

満員電車にふたりきりなり加害者のをんなとまさぐられるわたくしと

四枚のコインしづかに落ちてゆき落ちきるまでの刹那と思ふ

女に生まれて男で生きる 溶けてゆくジョージア・オキーフの花の額

その性で生まれてその性で生きることを知らずにわたくしは死ぬ

小さき小さき猫いつぴきさまよひて歩きをりひとに背中を向けて

体育着に着替へしときにをところは腋毛のないことをはやしたて

男子校に通ふからには男子としてをらねばならぬ知られてはならぬ

体毛の濃きをうとみき剃ることもなしえぬきたなきこの脚をみる

まひろき畑の雑草を抜く農薬の撒かれたる畑はすぐ終はる

揺さぶられて起きる真夜中わたくしの上に腰をふるをとこあり

修学旅行はこれにて終はるわたくしの終はることのないPTSD

ぬばたまの闇のまなこをとらへてはみつめつつあるいへのまなかに

いちばんさいごに別れるひとはだれだらう葡萄の房をみづにひたして

誰にでも言はぬこと言へぬことのありふくらんでゆくあをき柿の実

夜の夢の森に流れるしづけさの中にあて永久に目覚めぬことの

霜月のあやまちそれは美しくほんたうだけを言はない遊び

すがしきは空に根をはる落葉樹、光のたまる冬の浴槽

わたくしもひとすぢの傷にすぎねども忘れがたきはこの黄水仙

この星のことをなしえぬわたくしは星々を渡り歩いてくらす

曇りなき世界とめぐり遇ひてのちあなたのことを半分許す